

もちがせ地域未来プラン（たたき台）

用瀬町総合支所

1. 目的位置づけ

用瀬地域特有の課題解決に向け、それぞれ特有の地域資源を活かしながら、地域振興を図るための未来に向けたプラン。

2. 地域の現況

●位置・地勢について

- ・用瀬地域は鳥取市の南の玄関口に位置し、東は八頭郡八頭町、（西は鳥取市佐治町、）南は八頭郡智頭町及び岡山県津山市（、北は鳥取市河原町）に接している。
- ・面積は 81.60 km²で鳥取市全体の 10.66%を占め、うち 91%を林野が占めている。
- ・地域の中央を一級河川の千代川が北流し、これに奥部を源とする佐治川、安蔵川、赤波川が合流している。

●土地利用について

●人口について ⇒新市域振興ビジョン 10 ページ、総合支所基礎調査等を参照

- ・人口は、平成 16 年の合併時は 4,253 人（H16.11.1 現在の住民登録）
令和 6 年 4 月 1 日は 3,140 人、増減率は△26.2%
- ・世帯数は、平成 16 年の合併時は 1,248 世帯（H16.11.1 現在の住民登録）
令和 6 年 4 月 1 日は 1,306 世帯、増減率は 4.6%
- ・高齢化率は令和 6 年 4 月 1 日現在 42.9%（1,346 人／3,140 人）

3. 地域の特性・資源

⇒新市域振興ビジョン 85 ページを参照（文面は最新情報にアップデート）

●地域の歴史

- ・「用瀬」の地名は、戦国時代末期にこの地域を治めていた用瀬氏に由来するといわれている。
- ・用瀬町は古くから交通の要所。藩政時代には参勤交代の大名らの休憩所等として賑わい、江戸時代中期から末期を最盛期として、政治・経済・文化等が繁栄した。

- ・用瀬町の東にある「三角山（みすみやま）」は修験者の修行の地として知られ、また山岳信仰の聖地として多くの参詣者も訪れた。
- ・明治 22 年の町村制施行の際に大村・用瀬村・社村の 3 村となり、大正 7 年には用瀬村が用瀬町となった。その後、昭和 30 年 3 月に 1 町 2 村が合併して新たな「用瀬町」が誕生。さらに、平成 16 年 11 月には 1 市 8 町村の市町村合併により、新生「鳥取市」が誕生し、「鳥取市用瀬町」として現在に至る。

●地域の特性

- ①本市の南の玄関口に位置し、町の中央部を一級河川千代川が縦断して北流、これに並行して国道 53 号並びに JR 因美線が通っている。鳥取自動車道の全線開通により関西圏からのアクセス道を有する交通の要所となる。
- ②毎年旧暦の 3 月 3 日、男女一对の紙雛を棧俵に乗せて川に流し、一年間の無病息災を祈る情緒豊かな民俗行事「流しびな（ひな送り）」が千代川河川敷で行われ、県内外から多くの観光客が訪れる。
- ③千代川水系の赤波川中流域には約 1.2 km にわたり用瀬花崗岩が分布し、30 以上ものおう穴が見られる赤波川溪谷がある。また、中津美川の上流部にある中津美溪谷には大小の滝があり、なかでも不動滝は高さが 20m にもなる。
- ④農業は稲作が中心、近年は農作物の少量多品目の作付が増えている。
- ⑤愛宕山、三角山、洗足山と連なる「用瀬アルプス」は花崗岩で形成された山々で、史跡や伝説等の歴史や豊かな自然景観に触れながら、四季折々の登山が楽しめる。

●地域の資源

区分	主なもの
特産品	しいたけ、白ネギ、アスパラガス、茶、アンコロ、流しびな
観光	流しびな行事（旧暦 3 月 3 日）、流しびなの館、観光物産センター、赤波川溪谷おう穴群、中津美溪谷不動滝、用瀬アルプス（三角山、洗足山）、景石城跡、カヌー水辺公園、ふれあいの水辺、みつばつつじ（愛宕山、一の谷公園）
イベント	流しびな行事、三角山神社例祭（お山さん）、もちがせ流しびなマラニック大会、ふれあいフェスティバル、おう穴まつり、用瀬山系トレイル交流大会、川遊びフェスティバル、犬山神社例祭（花籠祭り）、いなば用瀬宿横丁さんぽ市

4. 地域の現状と課題、めざす将来像

⇒ビジョン 27～28 ページを参照（文面は最新情報にアップデート）

●地域の現状と課題

①安全・安心のまちづくり

- ・今日の大規模化する自然災害や未知の感染症等の新たな危機に対し、地区や集落単位での避難訓練や防災知識の習得等、地域住民が中心となった防災・減災に対する取組を支援するとともに、鳥取市保健所との連携のもと、事業継続計画などの危機管理体制の強化を図る。
- ・少子高齢化や過疎化が進行するなか、各種団体等や住民組織と連携し、持続可能な生活交通体系の構築など、誰もが住み慣れた地域で安心していつまでも暮らし続けることができるまちづくりを進める。

②農林業の振興

- ・地域の面積の大半を占める農地や森林は、生活環境の保全や山地災害の防止など多面的機能を有しており、これらを維持していくことの重要性が高まる一方、他の中山間地域と同様に、人口減少や高齢化による農林業の後継者問題は深刻さを増している。
- ・今後も継続して、県等関係機関と連携を図りながら、鳥獣被害の対策や農地・森林の保全活動への支援をはじめ、地域ぐるみで鳥獣対策や担い手の育成・確保、集落営農の組織化などの経営の合理化・効率化を推進していく。

③商工観光の振興

- ・多くの登山愛好者が訪れる三角山・洗足山を有する「用瀬アルプス」や、赤波川渓谷おう穴群・中津美渓谷など、豊かで特色ある自然に恵まれている。
- ・民俗文化に触れることのできる「流しびな行事」のほか、景石城跡などの貴重な歴史資産や、上方往来の風情を残す「用瀬宿の街並み」・瀬戸川の景観も、個性ある観光資源として活用していく。
- ・これら観光資源の情報発信や周辺地域等との連携などにより、交流人口や関係人口の増加につなげる取組を支援し、地域に経済効果を波及させることが重要である。
- ・町内の小規模事業所などに対しては、関係部署と連携しながら情報提供や相談体制の充実などに今後も継続して取り組む。

④賑わいの創出

- ・用瀬の豊かな自然や魅力ある歴史・文化などの地域資源や超高速情報通信網を活

用し、イベントやワーキングホリデー滞在者への支援などにより都市部との交流を進め、地域の賑わいを創出するとともに関係人口の創出・拡大に取り組む。

- ・ 少子高齢化の進行や人口減少に伴って増加傾向にある空き家等の有効活用、移住定住希望者への情報提供や相談体制などの支援の充実に、関係機関・団体と連携して取り組む。

⑤歴史・文化の継承

- ・ 古くから人々は、用瀬の豊かな自然景観の中で、独自の文化と歴史を築いてきた。「景石城跡」などの貴重な史跡や、「用瀬の流しびな」・「江波の三番叟」に代表される民俗文化などを大切に保存し、継承していくことが重要。
- ・ 次代を担う子どもたちがふるさとを大切にする思いを持ち続けるため、これらかけがえのない歴史・文化を伝える取組を進める。

●めざす将来像について

「人と自然が調和した 文化のかおり高いまち 用瀬町」

用瀬町は清らかな水の流れる千代川や花崗岩からなる急峻な山々などの自然に恵まれ、用瀬アルプス、赤波川渓谷おう穴群等の特色ある景観や、上方往来の風情を残す街並み、「用瀬の流しびな」をはじめとする民俗文化などを今に伝えています。

貴重な史跡や伝承されている伝統行事等を保存し次代につなぎ、自然豊かな地域を愛し、ふるさと用瀬を大切にする思いのあふれるまちを目指します。

また、これらの豊かな資源を交流人口や関係人口の拡大に活用し、各種団体や地域住民と協働して賑わいのあるまちづくりを進めるとともに、住み慣れた地域でいつまでも生き生きと暮らし続けることができるまち“流しびなの里もちがせ”を目指します。



地域未来プラン 関連項目（抜粋）



鳥取市新市域振興ビジョン

～全市一体となった夢のあるまちづくり～

令和3年7月改訂

用瀬町

◆ 用瀬町

● 歴史

「用瀬」の地名は、戦国時代末期にこの地域を治めていた用瀬氏に由来するといわれます。用瀬町は古くから交通の要所であり、藩政時代には参勤交代の大名らの休憩所等として賑わい、江戸時代中期から末期を最盛期として、政治・経済・文化等が繁栄しました。

用瀬町の東にある「三角山（みすみやま）」は修験者の修行の地として知られ、また山岳信仰の聖地として多くの参詣者も訪れました。

明治22年の町村制施行の際に大村・用瀬村・社村の3村となり、大正7年には用瀬村が用瀬町となりました。その後、昭和30年3月に1町2村が合併して新たな「用瀬町」が誕生しました。

● 特性

①本市の南の玄関口に位置し、町の中央部を一級河川千代川が縦断して北流し、これに並行して国道53号並びにJR因美線が通っており、鳥取自動車道の全線開通により関西圏からのアクセス道を有する交通の要所となっています。

②毎年旧暦の3月3日、男女一対の紙雛を棧俵に乗せて川に流し、一年間の無病息災を祈る情緒豊かな民俗行事「流しびな（ひな送り）」が千代川河川敷で行われ、県内外から多くの観光客が訪れます。

③千代川水系の赤波川中流域には約1.2kmにわたり用瀬花崗岩が分布し、30以上ものおう穴が見られる赤波川溪谷があります。また、中津美川の上流部にある中津美溪谷には大小の滝があり、なかでも不動滝は高さが20mにもなります。

④農業は稲作が中心で、近年は農作物の少量多品目の作付が増えています。

⑤愛宕山、三角山、洗足山と連なる「用瀬アルプス」は花崗岩で形成された山々で、史跡や伝説等の歴史や豊かな自然景観に触れながら、四季折々の登山が楽しめます。

● 資源

区分	主なもの
特産品	しいたけ、白ネギ、アスパラガス、茶、 アンコロ 、流しびな、知足窯
観光	流しびな行事（旧暦3月3日）、「江波の三番叟」（農村歌舞伎、10月第3日曜日）、流しびなの館、観光物産センター、赤波川溪谷おう穴群、中津美溪谷不動滝、用瀬アルプス（三角山、洗足山）、三角山神社、景石城跡、カヌー水辺公園、ふれあいの水辺、みつばつつじ（愛宕山、一の谷公園）
イベント	流しびな行事、三角山神社例祭（お山さん）、もちがせ流しびなマラニック大会、ふれあいフェスティバル、おう穴まつり、用瀬山系トレイル交流大会、川遊びフェスティバル、犬山神社例祭（花籠祭り）、いなば用瀬宿横丁さんぽ市

◆用瀬町

① 安全・安心のまちづくり

今日の大規模化する自然災害や未知の感染症等の新たな危機に対し、地区や集落単位での避難訓練や防災知識の習得等、地域住民が中心となった防災・減災に対する取組を支援するとともに、鳥取市保健所との連携のもと、事業継続計画などの危機管理体制の強化を図ります。

また、少子高齢化や過疎化が進行するなか、各種団体等や住民組織と連携し、持続可能な生活交通体系の構築など、誰もが住み慣れた地域で安心していつまでも暮らし続けることができるまちづくりを進めます。

② 農林業の振興

用瀬町の面積の大半を占める農地や森林は、生活環境の保全や山地災害の防止など多面的機能を有しており、これらを維持していくことの重要性が高まる一方で、他の中山間地域と同様に用瀬町においても人口減少や高齢化による農林業の後継者問題は深刻さを増しています。

今後も継続して、県等関係機関と連携を図りながら、鳥獣被害の対策や農地・森林の保全活動への支援をはじめ、地域ぐるみでの鳥獣対策や担い手の育成・確保、集落営農の組織化などの経営の合理化・効率化を推進していきます。

③ 商工観光の振興

用瀬町は、多くの登山愛好者が訪れる三角山・洗足山を有する「用瀬アルプス」や、赤波川溪谷おう穴群・中津美溪谷など、豊かで特色ある自然に恵まれています。

さらに、民俗文化に触れることのできる「流しびな行事」のほか、景石城跡・三角山神社などの貴重な歴史資産や、上方往来の風情を残す「用瀬宿の街並み」・瀬戸川の景観も、個性ある観光資源として活用していきます。

今後は、これら観光資源の情報発信、ガイド育成や周辺地域等との連携などにより、交流人口や関係人口*の増加につなげる取組を支援し、地域に経済効果を波及させることが重要です。

また、町内の小規模事業所などに対しては、関係部署と連携しながら情報提供や相談体制の充実などに今後も継続して取り組みます。

④ 賑わいの創出

用瀬の豊かな自然や魅力ある歴史・文化などの地域資源や超高速情報通信網を活用し、イベントやワーキングホリデー滞在者への支援などにより都市部との交流を進め、地域の賑わいを創出するとともに関係人口の創出・拡大に取り組みます。

また、少子高齢化の進行や人口減少に伴って増加傾向にある空き家等の有効活用、移住定住希望者への情報提供や相談体制などの支援の充実に、関係機関・団体と連携して取り組みます。

⑤ 歴史・文化の継承

古くから人々は、用瀬の豊かな自然景観の中で、独自の文化と歴史を築いてきました。

「景石城跡」などの貴重な史跡や、「用瀬の流しびな」・「江波の三番叟」に代表され

る民俗文化などを大切に保存し、継承していくことが重要です。

次代を担う子どもたちがふるさとを大切にする思いを持ち続けるため、これらかけがえのない歴史・文化を伝える取組を進めます。

●めざす将来像

人と自然が調和した 文化のかおり高いまち 用瀬町

用瀬町は清らかな水の流れる千代川や花崗岩からなる急峻な山々などの自然に恵まれ、用瀬アルプス、赤波川溪谷おう穴群等の特色ある景観や、上方往来の風情を残す街並み、「用瀬の流しびな」、「江波の三番叟」をはじめとする民俗文化などを今に伝えています。

貴重な史跡や伝承されている伝統行事等を保存し次代につなぎ、自然豊かな地域を愛し、ふるさと用瀬を大切にする思いのあふれるまちを目指します。

また、これらの豊かな資源を交流人口や関係人口^{*}の拡大に活用し、各種団体や地域住民と協働して賑わいのあるまちづくりを進めるとともに、住み慣れた地域でいつまでも生き生きと暮らし続けることができるまち“流しびなの里もちがせ”を目指します。